

夫馬 進著

## 燕行使と通信使

金 榮 鎮

(翻譯・清水 亮)

書評者は韓國で「朝鮮後期の漢文學」を専攻している若手の研究者である。數年前から知人たちを通じて夫馬進教授のご尊名とご學問について耳にしてきたところ、二〇〇八年八月の初め、韓國天安市にある朝鮮の著名な實學者、湛軒洪大容(一七三一―一八三三)先生の生家跡および墓所を訪問した席で、初めてご挨拶する機會を得た。それは、夫馬進教授の今回の力作『燕行使と通信使』(韓國、新書苑、二〇〇八)が出版された、まさにその直後であった。

夫馬進教授は明清社會史分野での著名な研究者であると存じ上げている。そのような方が韓國史を中心に据え、明清と朝鮮、朝鮮と日本の間の國際關係の中で、はば廣い視野から學術・文化史の姿を捉えた本書を出されたという點が畏敬するに値する。本書の中で藤本幸夫教授のお名前が何度も擧がっているのも驚きであった。一昨年に藤本幸夫教授の『日本現存朝鮮本研究 集部』(京都大學學術出版會、二〇〇六)を拜見し、その生涯にわたる

眞心と學問の精密さに感嘆したのだが、お二方が長年の知人であるという事實を知って、京都大學中國學の學風と名聲に改めて驚嘆せざるをえなかつた。

書評者は燕行使と通信使に關心を抱いているものの、自身の學問の年輪や研究分野の幅から見れば、近世の東洋三國を合わせる廣大な研究領域を持つておられる夫馬進教授の大作を書評するというのは、當初分に過ぎたことであると考えた。しかし身に餘る光榮と思ひ、書評を念頭に置いて讀み始めた。そして、單なる専攻分野の違いだと容易く考えることさえできない、書評者の力不足を切に感じた。そのため、本格的な書評はできず、書評者の管見で見て感じた點の一端をここに記した。その道の大家たる諸氏の了解を願う次第である。

## 二

本書は一篇を除き、一九八八年から二〇〇六年までに日本で發表された個々の論文を編輯して、まず韓國で單行本として出版されるという獨特の經過を辿つたものである。その理由は、朝鮮を中心に据えて、明清、日本、琉球との國際關係の中で、當時の朝鮮の學術の狀況を検討しているからである。まず本書の目次を示せば次のようになる。

第一部 十六・十七世紀、燕行使の中國觀察

第一章 萬曆二年朝鮮使節の「中華」國批判

第二章 趙憲『東還封事』にみえる中國報告

第三章 閔鼎重『燕行日記』にみえる王秀才問答について

## 第二部 十八・十九世紀、燕行使と通信使における學術論議と學

### 術交流

第四章 朝鮮燕行使申在植の『筆譚』に見える漢學・宋學論議とその周邊

第五章 朝鮮通信使による日本古學の認識——朝鮮燕行使による清朝漢學の把握を視野に入れ

第六章 一七六四年朝鮮通信使と日本の徂徠學

第七章 朝鮮通信使と日本の書籍——古學派校勘學の著作と古典籍を中心に

## 第三部 燕行録と使朝鮮錄

第八章 日本現存朝鮮燕行録解題

第九章 使琉球録と使朝鮮錄

各章を論評する前に、まず一つの事案に言及しようと思う。燕行録の資料問題である。韓国では最近、燕行録に對する關心が大いに高まっている。二〇〇一年一月、林基中編『燕行録全集』（東國大學校出版部）一〇〇冊（三九八種收録）が刊行されたことに觸發されたのである。『燕行録全集日本所藏編』三冊は別冊非賣品として刊行されたのだが、これこそまさに夫馬進教授が蒐集したものである。一九六〇～六二年、成均館大學校大東文化研究院から『燕行録選集』上下冊（三〇種收録）が出されたことがあったが、林基中教授個人によって、その後わずか四〇年で總集の成果を挙げたわけである。二〇〇八年二月には、再び成均館大學校大東文化研究院から『燕行録選集補遺』三冊（二〇種收録）が出され、二〇〇八年三月には、林基中編『燕行録續集』（尙文

社、非賣品）五〇冊（一七〇種收録）が追加刊行された。燕行録の範疇を廣く捉えるならば、これによって合計六百種近い燕行録が集まったわけである。五百年近くほぼ同じ使行路を通りながらこれほど多くの旅行記が遺されたという事實は、世界史的に稀なことだと著者は言う。燕行録は現在、中國でも高い關心が寄せられている。そして日本では、夫馬進教授が最も旺盛に研究を發表している。一方、林基中編『燕行録全集』および『燕行録續集』は、その功勞と同じくらい問題も抱えている。實に膨大な作業を一個人がしたことから生じた當然の結果かも知れない。編集の凡例もなく、資料の解題はおろか、現在の所藏も全く明らかとせず、その上、平安道、咸鏡道の紀行と詩集（表題が『西行録』『北行録』）や日本への通信使行記録（表題『隨槎日録』）までも含める誤りを犯している。撰者の誤謬、撰者考證の放棄など問題は一つ二つではない。韓國人が韓國資料を編纂して、外國人により考訂される状況となった<sup>1)</sup>。また、最近、韓國では燕行録に對する熱氣の高まりにより、燕行録關聯の研究論文をすべて網羅した『燕行録研究叢書』が出された。この現状はすべて林基中編『燕行録全集』の出版に觸發されたものである。しかし問題は、燕行録研究の幅と深さを見せてくれる成果が、さほど目につかないという点である。このような點から、夫馬進教授の本書が提示している、比較史の方法を基盤とした資料客觀化の視角は、教えてくれる點が多いと言えよう。

### 三

第一部「十六・十七世紀、燕行使の中國觀察」に掲載された三

篇中、第一章と第二章は萬曆二年（一五七四）の朝鮮使節許翁（一五五一―八八）と趙憲（一五四四―九二）の使行日記を通じて、明國の實相報告を考察したものである。朝鮮知識人たちの小中華意識の淵源については全く無關心である現状を反省してみようという、夫馬進教授の問題提起は斬新であった。すなわち、壬申倭亂の際に明の救援を受け、以後、滿洲族（後の清朝）に蹂躪されることで生じた「朝鮮の小中華意識」を、そのような事件が起ころ以前、知識人たちが「中華」の土地である明を旅行した際に、何を見、どのように記録したかによって探ろうとしたのである。政治的にも社會的にもいまだ比較的堅實な時代であったこの時期、明の有様を見ながら、二人の朝鮮知識人は現實の中國をほぼ「中華」人の立場から強力に批判しており、このことから朝鮮の「小中華」意識は滿洲族による明朝崩壊以前にすでに胎動していたと結論づけた。

第二章では、趙憲が歸國してすぐさま國王に提出した「東還封事」にみえる中國報告は、本人の『朝天日記』での描寫と異なり、中國現地で目撃した否定的な有様は除去して、望ましい社會の有様に歪曲し報告している事實を指摘し、その理由——朝鮮の現状を批判するためには中國を完全な理想國家として提示する方が効果的である——を説明した。

第三章は、閔鼎重（一六二八―九二）の『燕行日記』に載せられた玉田縣の王秀才との「筆談」資料を用いて、河北省の小都市の一士人が有していた國内外の情勢などに關聯した常識を、一つ一つ紹介している。當時の中國人ならば文章で書き記す氣にもならない風俗、瑣事、常識、心理などを、異邦人の旅行記は詳細に

収めているのだが、私的記録の魅力をよく看取した論文であると云えよう。

第一部が朝鮮使行員の目に映った明・清の有様の觀察ならば、第二部「十八・十九世紀、燕行使と通信使における學術論議と學術交流」は、より本格的な場から學術交流の實相を導き出したものである。

第四章「朝鮮燕行使申在植（一七七〇―一八四三）の『筆譚』」に見える漢學・宋學論議とその周邊」は、藤塚鄰の大著『清朝文化東傳の研究』（圖書刊行會、一九七五、一九三五年の東京帝國大學博士學位請求論文を復刻）で見過ごされた部分——清朝漢學は果たして金正喜の歸國（一八一〇）とともに順調に普及したのか——に主眼を置き考察したものである。この資料は一八二六年の冬至兼謝恩使の副使として北京に赴いた申在植と、葉志誥・李璋煜・汪喜孫・王筠など清の學士たちとの間の四回の會合で交わされた筆談を整理したものである。筆談の内容に關聯して、一八二二年、隨行員の身分で朝鮮―清を往復した後、引き続き學術書簡を往復しつつ清の學士たちの「漢學」を論駁した金善臣（一七五五―一八四六頃）の資料が収集された。漢學（考證學）の絶頂期であった清朝と違い、宋學（朱子學）が一貫して國是であった地が朝鮮であり、金善臣と申在植は宋學の信奉者もしくは宋學擁護論者の立場から、清朝の現状が文化的秩序の混亂の中にあるという、深刻な憂慮を表明したとする。

第五章「朝鮮通信使による日本古學認識——朝鮮燕行使による清朝漢學の把握を視野に入れ」は、これまで燕行使と通信使が別途研究されてきたのを反省し、更に、朝鮮文化の日本への傳達と

いう一方的視角だけで研究されて来た通信使研究に對して、その逆の日本からの知的刺激を考察したものである。日本での古學形成と清朝での漢學發生がほぼ同時期であったことよつて、燕行使と通信使、この兩使節が獲得した異國の學術情報が朝鮮でどのように交差したのかを明らかにしたのである。一七四八年の通信使行に限定して筆談資料を収集し、彼らの日本古學に對する認識を考察した結果、次の點を指摘した。(1) 日本古學が反朱子學立場に立っているだけでなく、古書を読むためにはその當時の言語に精通しなければならないという日本の經典解釋方法論が、通信使一行に傳えられた。通信使一行たちは日本のこのような學問風土を慨嘆した。(2) 幹線である燕行使の學術情報探知機能が暫時停止した間、支線である通信使の學術情報探知は實時間で傳えられた。(3) 一七四八年の通信使は清朝漢學が何なのか全く分からないまま日本古學と接した。すなわちこの時期、これまでにない學術動向をまず把握したのは、他ならぬ通信使の方であった。中國から學問を永らく受容してきた朝鮮の歴史において、日本古學に對する把握の困難さ、國內に正確に傳達することの困難さなども相俟つて、以後、學術史の展開に一定の餘波を残した。

第六章「一七六四年朝鮮通信使と日本の徂徠學」は第五章の續篇に該當するものであり、一七六四年の通信使を通じて兩國の學術關係を考察したものである。それは、朝鮮にはない異質的な學問に日本で接する際にどのように對應し、歸國後、どのように紹介したのかという點である。一七六四年の通信使は「徂徠學(派)」に對する認識の進展を果たし、「徂徠集」「辯道」「辯名」などの書を手して歸國した。以前に比べて兩國の學術關係が大

きく轉換したわけだが、通信使行員たちは日本の學術をそのまま受け入れもせず、また歸國後ろくに傳えもしなかった。その理由は、宋儒によらないで經典を論ずれば嚴重な處罰を受ける朝鮮の現實、有史以來日本の學術を受け入れた經驗が一度もなかった點、「小中華意識」で清朝の學術文化さえ受け入れることを拒絶していた點などのためである。日本の學術が目に見える形で影響を与えるようになったのは、一七六四年から半世紀が経つた後、丁若鏞(一七六二—一八三六)と金正喜(一七八六—一八五六)たちによつてである。

第七章「朝鮮通信使と日本の書籍——古學派校勘學の著作と古典籍を中心に」では、通信使たちが古學派、特に徂徠學派が著した校勘學の著作と、當時日本に傳えられていた古書籍についてどのような筆談を交わしたのかを扱つたものである。一七六四年の通信使行さえも、日本の校勘學の著作と古書籍に關する情報は極めて限定的であつて、『四庫全書』にまで収録された『七經孟子考文補遺』『古文孝經』『論語集解義疏』などを見た者は、金正喜が最初だといふ。

この著書第七章までの第一部と第二部が原資料を通じた著者の分析と解釋ならば、第三部第八章「日本現存朝鮮燕行録解題」と第九章「使琉球録と使朝鮮録」は、資料自體についての概略と考證である。書評者が本書を受け取つて何よりもまず調べてみた部分は、僭越ながら第八章であつた。文獻考證と系譜學に大いに關心があるからである。ところがこの第八章を讀んで驚嘆を禁じえなかつた。それは、資料一つ一つを几帳面に讀んで作者と著作年代を考證していく、その緻密さのためである。資料と情報の面で、

このような作業は韓國の研究者の方がより有利なはずだが、この部分を讀んでむしろ韓國の研究者たちは猛省しなければならぬという思いが生じた。「日本現存朝鮮燕行録解題」には微々たる誤謬も見えるが、これは當初から林基中編『燕行録全集』(二〇〇一)の問題點に起因するものが多い。今、若干の誤謬を指摘し、補充の資料を紹介する。

7. 『燕行日記』二卷二冊、尹汲撰

【補充資料】韓國啓明大學校圖書館古文獻室に『燕行別章』(筆寫本、一帖)が所藏されている。尹汲が一七四六年の冬至謝恩使の副使として北京に赴く時、友人たちが饞に贈った送詩と送序五十一件を集め装帖したものである。李緯、朴弼周、李秉淵など十八世紀中葉の老論界の名士たちが網羅されている。

8. 『丁亥燕樞錄』一巻一冊、李心源撰

【補充資料】李心源の生没年は一七二二―一七〇〇。

9. 『燕行記著』一巻一冊、撰者未詳(一七八二年の隨行員と推定)

【補充資料】鄭存謙(一七八二年の正使)撰『燕行日記』二卷(韓國、個人所藏)に隨行員名單がある。撰者は正使伴備の李喜經、または副使伴備の洪樂汝であろうと推定される。李喜經(一七四五―一八〇五以後)は朴趾源(一七三七―一八〇五)の門人であり、一七八二年から一七九九年まで五回も北京に赴いた。詩集として『綸菴集』(寫本一巻、天理圖書館所藏)、雜錄として『雪岫外史』(寫本零本一巻、東洋文庫所藏)が傳わる。夫馬進教授が傳えるところによれば、『燕行記著』末尾には十枚餘りの一般詩が收録されているというが、これがこの書の撰者を確定で

きる端緒になるかも知れない。

10. 『燕行日記』二卷二冊、金箕性撰

【訂正】この資料を巡って、近年に今西龍が鈔寫させたようだという言及は誤りである。なぜならば、この本に押された藏書印「頤軒」はまさしく撰者金箕性(一七五二―一八一、初名は斗性、字は成汝、本貫は光山)の堂號(「頤吉軒」)だからである。したがって、この本は撰者の手澤本である。夫馬進教授が言うように、天理圖書館今西文庫に所藏された洪昌漢(一六九八―一七四九、權臣洪國榮の祖父)の『燕行日記』が同一の筆跡ならば、これは金箕性の目下の同一人物が筆寫したものであろう。また、撰者略歴が未詳であるというが、金箕性は悲運の人物、思悼世子(一七三五―一六二、英祖の子、正祖の父)の婿になった光恩副尉である。彼の生涯は仲兄金箕憲が撰した「有明朝鮮國綏祿大夫光恩副尉兼五衛都總管金公墓誌銘」(ソウル大學校奎章閣所藏)に詳しい。

12. 『燕行詩』(薊程詩稿)一巻一冊、撰者未詳

【訂正】この書は夫馬進教授が言うように『薊山紀程』(『燕行録選集』)『國譯燕行録選集』『燕行録全集』にすべて收録)から詩だけを抜粋して編輯したものとよい。ただし、内容を通じて撰者が李海應(一七七五―一八二五)であることを確定できる。李海應の字は聖瑞、號は東華、本貫は韓山であつて、五十一歳の時である一八二五年の生員試に合格後、同じ年に没した。文集として『東華遺稿』三卷(寫本)が國立中央圖書館に傳わる。

13. 『中州偶錄』(入燕記)一巻一冊、撰者未詳

【補充資料】内題が「磬山雜著」であることから見て、撰者の號

は磐山と思われる。一八〇七年の正使南公轍の隨行員として北京に赴いたが、それが初めての燕行であった。夫馬進教授が新たに發掘（本書頁一四五）した南公轍の『燕行日記』（お茶の水圖書館所藏）に、『中州偶錄（入燕記）』の撰者を明らかにする端緒があるかも知れない。

14. 『燕行録』一巻一冊、李敬高撰

【補充資料】撰者李敬高（一七五六―一八三三）の略歴は、弟子金平默（一八一九―一八八）の「周衣李先生傳」、「周衣李先生詩集序」（重庵先生集）、國立中央圖書館所藏などに詳しい。彼は白沙李恒福（一五五六―一六一八）の庶子である李箕男の五世孫である。

【訂正】夫馬進教授は彼の詩を通じて、李敬高が「進士壯元」はしたが「文科及第」はできなかったようだとしたが、そうではない。彼の詩句は進士壯元も實情に恥ずかしい（進壯稱號愧實情）、すなわち進士試に合格したことがないが、清でそのように稱されるので恥ずかしいという意味である。

16. 『薊程散考』一巻一冊、金學民撰

【補充資料】撰者金學民（一七九二―一八六九）は一八三二年の副使金啓溫（一七七三―一八二三、『瘡軒私稿』筆寫本三二冊）がある、國立中央圖書館所藏）の父方の従兄弟の子であり、子弟軍官として參與したが、共に子弟軍官として赴いた金學會（一七八二―一八三五）もまた、金啓溫の父方の従兄弟の子である。この二人はどちらも史曹判書を務めた金尙星（一七〇三―一八五五、號は陶溪）の曾孫たちで、庶子の子孫と推定される。一方、金學會は先に述べた『燕行詩（薊程詩稿）』の撰者李海應とは息子夫婦の

親同士である。すなわち、金學會は李海應の次男李先者（一八〇四―七七、一八三一年進士試合格）の妻の父である。

17. 『隨槎日録』一巻一冊、撰者未詳

【補充資料】撰者は杞泉という號を持ち、低く貧しい身分であった。一八二五年の正使李勉昇（一七六六―一八三五）の隨行員として北京に赴き、一八三五年に没した。閩巷人（中人階級）の中に杞泉子金祐孫という者がおり、趙熙龍の『壺山外記』に載っている。金祐孫は趙熙龍と友人であって、『壺山外記』が編纂された一八四四年以前に没したことが確認できる。あるいは、この者かも知れない。夫馬進教授は彼と共に北京に赴いた人物である玄對と雨村が『隨槎日録』に多く登場するが未詳であるとするが、玄對は李敬天の堂號であり、雨村は南尙教（一七八三―一八六六、初名は尙中）の號である（字は文叔、本貫は宜豐）。南尙教は一九世紀の著名な詩人である。一八二六年の進士試に合格した後、蔭職として玄風縣監、豐基郡守、寧海都護府使、忠州牧使などを務めた。『靑琅玕館初稿』（高麗大學校等所藏）、『雨村詩稿』（ソウル大學校奎章閣所藏）などの寫本が傳わる。

18. 『游燕藁』三卷三冊、洪錫謨撰

【補充資料】洪錫謨の生没年は一七八一―一八五七。一八〇四年の生員試に合格し、蔭職として南原府使などを務めた。

19. 『隨槎日録』不分卷一冊、撰者未詳

【訂正】夫馬進教授は撰者が書狀官趙秉龜の隨行員であるとするが、本文を調べてみると撰者は趙秉龜と以前から舊知の間柄であっただけであり、正使柳相祚の隨行員として赴いたこと（初回）が分かる。撰者は同行した趙秀三について「今年爲六十八、而七

赴燕京」と記している。趙秀三（一七六二～一八四九）は有名な閻巷（中人）詩人であり、趙熙龍たちの記録（『崑山外記』）には全部で六回北京に赴いたことで登場している。撰者の記録が不明確である可能性がある。現在、韓國の學界では、趙秀三が六回北京に赴いたことで廣く知られているので、混同を防ぐために別途註釋が必要のように思われる。

20. 『燕槎酬帖』 不分卷二冊、趙鳳振等撰

【補充資料】一八三三年に使用した三人の詩、應酬作を集めたこの書に見える憲秀は、閻巷（中人）詩人として有名な崔憲秀である。本貫は水原、字は元度、號は愚山である。筆寫本の詩集『愚山稿』、『愚山詩集』などが韓國學中央研究院藏書閣をはじめとして數處に傳わっている。沈能淑（一七八二～一八四〇）の文集『後吾知可』（寫本、子孫家藏本）第六冊に「送崔元度赴燕說」がある。一八三六年の正使申在植（一七七〇～一八四三）に隨行していった崔憲秀へ餞に贈った文章だが、そこに次のような内容がある。「悼提癸巳（一八三三）隨副行人入燕、三年丙申（一八三六）遭疾荐朔而起、其秋隨上行人又適燕」。ここから彼が一八三三年、一八三六年の二回、北京に赴いたことがわかる。特に一八三六年には正使、副使、書狀官、崔憲秀たち隨行員三人、譯官李尙迪とで北京に行く道すがら詩を唱酬しつつ、北京に到着するやいなや中國木版本として『相看編』（ソウル大學校奎章閣等所藏）を刊行したのが有名である。

21. 『玉河日記』 不分卷三冊、金賢根撰

【訂正】撰者金賢根は純祖の駙馬東寧尉であり、父は金學淳でなく金漢淳である。祖父は淵泉金履陽（一七五五～一八四五、初名

は履水）である。

23. 『燕行錄』 不分卷三冊、朴永元撰

【補充資料】朴永元（一七九一～一八五四）の『燕行錄』は米國ハーバード大學に異本がある。『北轅錄』がしばしば引用されているが、この書はおそらく撰者と同じ少論系の先輩である李義鳳（一七三三～一八〇一、初名商鳳）のものである。延世大學校中央圖書館に寫本五卷五冊で所藏されている。李義鳳の本貫は全州、字は伯祥、號は懶隱であり、世宗の五男である廣平大君の子孫である。父親は大司憲を務めた李徽中（一七一五～八六）であり、彼は徐命膺（一七一六～八七）の姉の夫でもある。

24. 『燕行日記』 一卷一冊、黃某撰

【訂正】この書の撰者黃某は、醫員黃道淵（一八〇七～八四、號は惠翁・惠庵、本貫は昌原）である。彼はソウル武橋洞に開業をして名を馳せ、『醫方活套』などの著述を遺した。子、黃泌秀（號は慎村）もまた醫員であり、學者としても出版業者としても名のあつた人物である。

27. 『燕槎日錄』 三卷三冊、金直淵撰

【補充資料】金直淵の生没年は一八一～一八四、本貫は清風。異本の存在を確認できないとしているが、二〇〇七年一月京畿道義王市で、義王市に住む子孫の家に所藏された金直淵の文集『品山漫錄』（一至二〇冊）内の『燕槎錄』（漢文本二冊）と、これと別途の『연명기』（ハンゲル本三冊）が發掘、公開された。

28. 『游燕錄（燕行日記）』 一卷一冊、撰者未詳

【訂正】この資料は韓國と日本の東洋文庫に異本がある。林基中教授が十分な説明なく成仁浩（一八一五～八七）撰とのみしたこ

とに夫馬進教授は首肯しかねているが、この資料は成祐曾（一七八三―一八六四）の『茗山燕詩錄』と共に昌寧成氏の一族から刊行されたものである。成仁浩は成仁鎬の誤りである。一八六九年の燕行以後、掌樂院主簿、尙衣院主簿などを務めた。成祐曾は正祖年間、學問と文學で名を馳せた青城成大中（一七三二―一八〇九）の孫である。また、成祐曾と成仁鎬は父子の閨柄である。

30. 『昌寧成氏桑谷公派譜』を参照することができる。

30. 『燕行錄』二卷二冊、沈履澤撰

【補充資料】沈履澤の生没年は一八三二―一九二一。

32. 『燕記』五卷五冊、南一祐撰

【補充資料】南一祐（初名は一愚、號は愚堂）の生没年は一八三七―一八六。

33. 『觀華誌』一二卷六冊、李承五撰

【補充資料】李承五の生没年は一八三七―一九〇〇。異本が韓國の他に米國ハーバード大學にもある。

第九章の使琉球録と使朝鮮録とは、中國から琉球へ派遣された、また中國から朝鮮へ派遣された使臣が記録として遺した史料である。夫馬進教授はこの二つの史料の對比考察を通じて新しい事實を確認した。使琉球録は使朝鮮録に比べて資料の點數がはるかに少ないにもかかわらず、内容はより豊富であるということと、その理由の推定——朝鮮に對する精神的な距離感があまりに近かつたこと——、さらに『使琉球録』の陳侃と『使朝鮮録』の龔用卿の密接な關係など、興味ある追跡が續いている。書評者は『使琉球録』朝鮮活字本（二卷一冊、日本國會圖書館所藏）があったという事實を初めて知った（藤本幸夫教授によって初めて公にさ

れた）。ちょうど啓明大學校にも朝鮮活字本『使朝鮮録』（零本一冊）が所藏されているのだが、二冊が同じ甲辰字活字で、半部の大ささも二一・〇×一三・九センチメートルであり、同一の版であることを加えて確認した。

#### 四

本書を讀んで生じた幾つかの疑問點は次のとおりである。

一つは論考に核心的に援用されている一部の人物たちが、當時の學術史を代辯できるほどの、一級の人物たちであったかという點である。金善臣がまずそうであり、翁方綱の人物を講つた朴思浩がそうである。金善臣は金正喜が何度もその學問を批判したことがある。このような人物たち本位で朝鮮での漢學・宋學論争を論ずるのは、客觀的であるはずもない。

もう一つは翁樹崑と申在植についての記述に問題があるように思われる點である。翁樹崑が朝鮮の金石文資料入手のための私欲から、朝鮮の交遊者たちを利用しようとしたような印象を與える記述は改めなければならぬだろう。これらの國境を超越した、心から滲み出た深い親交を考慮するならば、あまりに否定的な印象を與える。また、申在植についての記述、すわなち『筆譚』の編纂に金正喜が介入しようだという言及（著者の序文に、これについての見解修正があるにはある）も、多少無理があるように思われる。申在植の著作は現存するものがないのでそのように言及したのだろうか。しかしながら、彼は當代最高の文學者が任命される大提學を務めた人物である。

「譯者後記」に言及されたことだが、本書の新しい視角と見解



は、韓國の研究者たちに大きな問題を投げかけた。十八世紀の通信使の、學問の實狀を暴き出した部分がそれである。著者の研究によれば、當時、通信使たちが日本で一方的に學問を傳授する立場にあったのではないという。むしろ朝鮮通信使たちが舊態依然として朱子學だけにしがみついている時、日本では古學で朱子學を相對化させる日本の學者たちに困陋であることを指摘されたという。結局、日本の古學は學問の自己運動として、清の考證學と似た時期に似た性格の學問段階に移行したのだが、これと比較すると、朝鮮の學問は朱子學から一步も踏み出せずにいたという、當時の朝鮮の學問の位相を確認することができるというのである。江戸時代の學問の發展性と相對的に、朝鮮の學問の停滞性が浮き彫りにされた部分である。洪大容、朴趾源、丁若鏞たち實學者の進歩的な學問が一方にあるにはあるものの、夫馬進教授のこの新しい主張に、韓國の學界は答えを見つけ出さねばならない時である。夫馬進教授のこの力作は燕行使と通信使を一つに束ねて見る視角を學界で最初に提示しただけでなく、比較を通じて客觀化と、既存の研究が光を當てていなかった細密な部分を鋭く扱うことによって、東アジアの旅行記録類から當時の人の意識、學術の現場などを生き生きと再構成した。六百種に迫る燕行録の山に戸惑い、瑣細な素材の接近や、散發的な個別の燕行録探討に止まっている燕行録研究の現實態に警鐘を鳴らした勞作であると言いたい。著者は序文で「事實は小説よりも奇なり」という諺を記したが、事實を用いて小説並みに面白く書かれたこの力作を、あまりに無味乾燥に書評しようで恐縮するばかりである。

## 註

- (1) 夫馬進「林基中、夫馬進編『燕行録全集日本所藏編』」〔『東洋史研究』第六一巻第四號、二〇〇二〕から最近の左江『燕行録全集』考訂〔『域外漢籍研究集刊』第四輯、中華書局、二〇〇八〕などがそうである。
- (2) 曹圭益編、全一〇冊、學古房、二〇〇七。
- (3) この本は乾、坤二冊であるが、乾冊はソウル大學校中央圖書館、坤冊は天理圖書館に別々に所藏されている。
- (4) 高祖父である成後龍が成俊燾(文科、監司)の庶子として生まれた。成後龍は醫員として名があったが、子孫たちは文學で名聲があった。その次男成琬が二六八二年の通信使行に書記として参加し、成琬の從曾孫成大中も一七六三年の通信使行に書記として参加した。
- (5) 金善臣と關連して、本書頁一三〇、註三六の、『清山小集』は現在では傳わらないようであるという記述は、修正されなければならないだろう。『清山小集』は、金鏞が編んだ『潭庭叢書』(筆寫本三四卷一七冊、李謙魯所藏)内に収められている。併せて、金善臣には兄、金善民(一七七二—一八一三)がいるが、一八〇四年、中國に行き來し『觀燕錄』(米國議會圖書館所藏、筆寫本二冊)を遺した。
- (6) 中庸說、昔曾聞之、今見其說、亦千古未發之旨、而善於彌綸矣。然向誰說此、若使清山輩見之、又欲起而爭之矣。〔『阮堂先生全集』卷二「與舍季」四〕。清山是功令中人、始未嘗下工於經術、其言皆沒裁量、雖宋以後門戶、便不足言、雖如不佞之最下劣者、未嘗以此等說來售也。不料於中

朝諸公、抗厲不下如是也。惟願諸公之知之而已。又無庸斤斤置下不已也。所謂論漢學等文、不解東西、顛倒昌披、幸亦更加備陳開導、此人頗慧、特見聞未廣、庶可開悟。〔『阮堂先生全集』卷五「與李月汀」〕。清山尙書辨愈往愈奇、不料清山之慧識通敏、如是轉轉入魔。此朱夫子所云心地不虛我見太重者、爲其大病根也。〔『阮堂先生全集』卷五「與人」〕。

(7) 申在植の文集は子孫の家に傳えられ受け繼がれてきたが、一九五〇年六・二五動亂の際、焼失したという。申在植の

『筆譚』(山東省圖書館本)は韓國でも譯註されたことがある(『冬至使申在植의會友錄』筆譚、李相敦、金哲譯註、保景文化社、二〇〇四、非賣品)。

(8) 鄭臺燮、河政植、沈慶昊、洪性鳩、權仁溶共譯。代表譯者は鄭臺燮である。

『연행사와 통신사』二〇〇八年五月 ソウル 新書苑  
A五判 五二八頁 二八〇〇〇ウオン